実践的防災教育推進講演会
守った命 そして復興へ
～東日本大震災から学ぶ～

平成24年7月3日（火）須崎市民文化会館大ホールにおいて、岩手県陸前高田市立気仙中学校前副校長鈴木秀行先生（現在は他校校長）を講師に招いて防災教育の講演会を行いました。

この講演会は本年須崎小学校が国、県の防災教育の指定事業を受けその一環として開催したものです。また、須崎中学校区の連携事業として、須崎、新荘、安和小学校の5、6年生、須崎中学校の全校生徒、須崎高校の1年生も総見として参加しました。

東日本大震災については、マスコミ等で繰り返し報道され、震災時に津波が町を襲う様子やその後の救援、復興活動などは私たちの脳裏に刻みつけられました。しかし、その時学校現場では何が起こっていたのでしょうか。

今回の講演講師の鈴木校長先生は震災発生時に当時の赴任校で生徒の避難の陣頭指揮をとり、その後の避難生活や、学校再開・復興活動までを身をもって体験されました。

鈴木先生は実際の写真を使いながら「私たちの知らなかった学校現場の現実」を生々しく語ってくれました。

平成23年3月11日、6校時、翌週15日に卒業式を控え全校生徒は体育館に集まり合唱練習をしていました。午後2時46分マグニチュード9の大地震が発生しました。

即座に全校生徒を日々避難訓練を重ねてきた所定の避難場所に（第1避難場所）誘導。

3時26分、大きな引き潮の後、津波の第1波が学校の近くの防波堤を超え、現在の避難場所では危険と判断し、想定外の山へ避難を開始。

その後、山の第2避難所へ到着しました。その頃には津波が陸前高田市の町を飲み込みはじめ、その様子を見ていた生徒からは、目の前に広がる信じがたい光景に、家族などを心配して悲鳴や泣き声が上がりパニック状態が発生していました。

（津波に飲み込まれる陸前高田市）

この状態を回避するために全生徒とともに、さらに山を登り町の様子が見えない林道に移動し、担任の先生方が生徒に寄り添い、励ましつづけました。津波来襲から約10分で陸前高田市の町が完全に水没しました。その時の様子を鈴木校長先生は「目の前を家々が流されていきます。流れていく家の屋根には2人の男性がいました。1人は茫然としたまま町を見つめ、もう1人はすっくと立ってこちらを見つめていました。目を疑う光景でした。今でも目に焼き付いています。」と語られました。

（水没していく気仙中学校）

その後、公民館に全校生徒を移動させ近隣の方々からいただいた毛布を何人もで使用し、余震の恐怖と寒さに耐えながら一晩を過ごしました。「その夜は、とてもきれいな星空でした。流れ星もたくさん見えました。一生涯忘れることのできない夜となりました。」と3月11日の夜のことを話されました。

警報が解除された後、中学校を確認しに行くと、堤防は完全に破壊され、校庭は海となり、校舎は屋上まで波が達し、内部は全壊していました。「体育館は姿をなくし、周辺には赤い布のついた棒がたくさん立っていました。一緒にいた先生が、それは発見されたご遺体があることを示していることを教えてくれました。周りを見回すと、辺り一面に赤い布がついた棒が立っていました。本校の学区の約4分の3の家々があの日を境に消えてなくなりました。」

陸前高田市では死者2009人、行方不明者41人、負傷者不明、家屋全壊3159棟、人口の10％が失われました。

その後、近隣の小学校で家屋を失った人たちの避難生活が始まりました。地区ごとに班を作り教室が割り当てられました。この時点でまだ引き取られていない生徒30名と教員は学校班となりました。朝昼晩の食事は3食とも小さなおにぎりが1つでした。水さえも出ません。しかし、生徒たちは誰1人不平不満を言いませんでした。

避難所では中学生が大きな戦力になりました。食材の搬入、食料の仕分け、不定期でやってくる支援物資の搬入、掃除、トイレの水汲み、まき拾い、薬剤師の助手となって

カルテ等の作成など、とにかく全員が働きました。

「今、実際に起きていることを理解し、その日を精一杯生きていたのだと思います。大きな悲しみを一時でも忘れようとしていたのかもしれません。」

学校班が最後の生徒を保護者にお返しできたのは3月23日でした。12日間を要しました。（何名もの保護者が亡くなり、両親を亡くした生徒もいました。）

校舎を失った気仙中学校では廃校になった小学校を与えられ学校を再開しました。気仙町から15ｋｍほど離れた山あいの学校です。この時、体育館はまだ遺体安置所になっていました。

この学校の被害は少なく電気も水道も使用できました。地震がうそのような環境です。

5月の気仙中学校生徒大会では「・・気仙中学校の形あるものは全て失われました。・・地震や津波は私たちの心に深い傷を残しましたが、全国の皆さんからのやさしい気持ちを知ることと、全校がより強く一つにまとまって目標に進むことができるようになりました。この気仙中復興宣言をまとめることで、支援、声援を下さった皆さんと自分たち自身に気仙中復興に向けて取り組むことを誓います。」という「気仙中学校生徒会復興宣言（中略）」が採択されました。

感謝と自分たちの決意が込められています。形のあるものは失っても、形のない文化を継承しよう。感謝の気持ちの立て看板の作成。お礼状を送ることなどが盛り込まれています。

生徒たちは4月は避難所の疲れや先の見えない不安、修学旅行や部活動もできない環境で暗い表情で元気もありませんでした。お風呂にもあまり入れない状況で体を動かしたり汗をかいたりすることを嫌がっていました。実際に教室には独特の匂いが漂っていました。

その後、県内外、全世界から温かい支援をたくさんいただき、ホールは学用品等の支援物でいっぱいになりました。名古屋市からも招待を受け飛行機を使っての職業体験学習に1、2年生は参加することができました。

北海道から転校してきた父親を亡くした生徒のつながりで音楽グループＺＯＮＥのミニライブも行われました。数多くのお手紙やメッセージも寄せられ校舎内いっぱいに展示しました。支援を頂いた方々には全校生徒で手分けして直筆のお礼状を書きました。

（9月1日被災後初めての温かい給食に喜ぶ生徒たち。）

「失ったものはたくさんありました。しかし、得たものもいっぱいありました。当たり前のことが奇跡であること 人とのつながり 人のやさしさ。生徒たちは、震災を通して、故郷への思いが強くなったように思います。保育士になって子どもの笑顔を増やしたい。医師になって地元に戻ってくる。市の職員になって復興の役に立ちたい。と夢や希望を語ってくれました。」

この後、震災を通してのメッセージを頂きました。

① 地震後、津波は必ず来る。すぐにより高い所へ避難。

② 時間との戦い。

③ 命が最優先。

④ 現実は想定を超える。

⑤ 計画は基本、臨機応変に。

⑥ 危険予知能力危機回避能力をイメージすること。

などです。

当時の気仙中学校3年生の書いた日本語大賞最優秀賞作文「感謝が結んだ絆」が朗読され会場には涙する人の姿も見えました。

最後に「須崎市の児童生徒の皆さん！命を大切にし そして生きぬいて 自分の夢を実現させてください。」との言葉を頂き講演は終了しました。

将来予想されている南海地震に備え各地で東日本大震災を教訓として防災への備えが進んでいますが、須崎小学校ではまず、「震災時の実際の学校の現状を知るためにこの講演会を企画しました。」

この講演会全体を収録したＤＶＤをご家庭や各職場での防災教育研修のために配布を行っています。須崎小学校のホームページから申込いただけますのでぜひご覧ください。

須崎市立須崎小学校
防災教育担当　山岡